

令和3年度 私立学校専門研修会・教育課程部会 実施報告

研究のねらい

これからの授業デザインと ICT 活用を考える～〈探究〉〈教科横断〉の視点を踏まえて～

新型コロナウイルス感染拡大による休校時の対策として、学校における ICT 環境整備の充実が急務となり、国は「GIGA スクール構想」を前倒して、1人1台端末環境の整備の早期実現を目指している。

さらに、令和4年度からは、高等学校では新学習指導要領が実施され、これからのカリキュラム・マネジメントの軸となる「理数探究」や「総合的な探究の時間」など教科横断的な科目が置かれる。

コロナ禍でオンライン授業をいち早く導入した私立学校も多く、今後はオンライン授業のメリットやデメリットを踏まえ、通常の対面式授業との効果的な併用を模索していくことも欠かせない。また、ICT 環境整備に加え、「探究」授業の取組みも喫緊の課題といえよう。

当部会では、ポストコロナ時代の授業や新学習指導要領を見据えて、子どもたちが創造的問題解決能力を育むために、ICT やデジタルツールを効果的に活用し、授業や PBL の実践・研究に取り組まれている神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部教授兼学長補佐・言語メディア教育研究センター長の石井雅章氏による講演を行う。

今回は会場となる聖光学院中学高等学校の全面的な協力により、休校時の対応についての実践発表、「探究」授業や ICT を活用した授業の視察、同校の先生方を交えての参加者による意見交換を通して、先進的な「探究」授業の取組み、教科の枠を超えた授業デザイン、さらには、これからの授業のあり方について考察していく。

会 期	令和3年6月18日（金）
会 場	聖光学院中学高等学校 （神奈川県横浜市中区滝之上 100 番地）
参加者数	133名
参加対象	理事長・校長・副校長・教頭・教務主任及び教育課程編成等担当教員

基本日程

	9	10	11	12	13	14	15	16	17
	30		30	15	20		30		30
6月18日 （金）	受付	開 会 式	講演	昼食	学校紹介 ・ 実践発表	授業視察・施設見学		分散会	閉 会 式

研 修 内 容

■ 講 演

演 題 「ICT を効果的に活用した探究型授業のデザイン」

講 師 石井 雅章 神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部教授
兼 学長補佐・言語メディア教育研究センター長

■ 学校視察 聖光学院中学高等学校

- ◇ 視察校代表挨拶 工藤 誠一 聖光学院中学高等学校理事長・校長
- ◇ 学 校 紹 介 花家 徹 聖光学院中学高等学校副校長
- ◇ 実 践 発 表 名塩 隆史 聖光学院中学高等学校教務部副部長
- ◇ 授業視察／施設見学

■ 分 散 会 <探究><教科横断>の視点から授業デザインと ICT 活用を考える

学 校 紹 介

聖光学院中学高等学校（理事長・校長 工藤 誠一）

設立母体は 1819 年にフランスで創設されたキリスト教教育修士会。昭和 33 年 4 月に聖光学院中学校が、昭和 36 年 4 月に聖光学院高等学校が創立された。建学の精神は、『カトリック的世界観にのっとり、人類普遍の価値を尊重する人格の形成、あわせて、高尚、かつ、有能なる社会の成員を育成する』にある。

2017 年度から「科学・技術で新しい時代を切り拓くリーダーを育む中高一貫プログラム」をテーマに 5 年間 SSH（スーパーサイエンスハイスクール）に指定されている。また外部からの特別講師も招きアカデミックな内容を盛り込んだ「聖光塾」や、選択芸術講座など特色ある教育を行っている。

講師・指導員（順不同）

石井 雅章 神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部教授
兼 学長補佐・言語メディア教育研究センター長

工藤 誠一 聖光学院中学高等学校理事長・校長

花家 徹 聖光学院中学高等学校副校長

名塩 隆史 聖光学院中学高等学校教務部副部長

平方 邦行 一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長

広石 英記 一般財団法人日本私学教育研究所特別招聘研究員／東京電機大学副学長

専門委員・指導員（順不同）

森 涼 学校法人石川高等学校・石川義塾中学校理事長・校長

松谷 茂 文化学園大学杉並中学高等学校校長

鈴木 弘 香蘭女学校中等科高等科校長

北村 聡 京都外大西高等学校理事・校長

須藤 勉 東京私学教育研究所参与

川本 芳久 一般財団法人日本私学教育研究所理事・事務局長

研修会日程・プログラム

会場：聖光学院中学高等学校

9:00	受 付・資料配付
9:30	<p>開 会 式 【会場：ラムネホール】</p> <p style="text-align:right">司会 川本 芳久 一般財団法人日本私学教育研究所理事・事務局長</p> <p>1. 主催者挨拶 平方 邦行 一般財団法人日本私学教育研究所所長</p> <p>2. 視察校代表挨拶 工藤 誠一 聖光学院中学高等学校理事長・校長</p> <p>3. 役員・専門委員紹介</p> <p>4. 研修会運営方針説明 森 涼 一般財団法人日本私学教育研究所教育課程専門委員長</p> <p>5. 日程説明</p> <p>6. 閉式</p>
9:30	<p>講 演 【会場：ラムネホール】</p> <p style="text-align:right">司会：須藤 勉 教育課程専門委員</p> <p style="text-align:right">講師紹介・謝辞：平方 邦行 一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長</p> <p>演 題 「ICT を効果的に活用した探究型授業のデザイン」</p> <p>講 師 石井 雅章 神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部教授 兼 学長補佐・言語メディア教育研究センター長</p>
11:30	昼 食
12:15	【昼食会場：食堂】
12:20	<p>学校視察 【会場：ラムネホール】</p> <p style="text-align:right">司会：吉岡 敏子 聖光学院中学高等学校広報</p> <ul style="list-style-type: none"> ●学校紹介 花家 徹 聖光学院中学高等学校副校長 ●実践発表 (テーマ)「課題設定力を育成する探究授業について ～SSHの5年間」 (発表者)名塩 隆史 聖光学院中学高等学校教務部副部長 ●聖光学院中学高等学校のICT導入・管理について (希望者のみ) ●授業視察【5限 13:20～15:10、6限 14:20～15:10】 ○第5校時は中学3年生「探究基礎」の授業、第6校時は高校1年生「理数探究」の授業を中心に視察。 ※第6校時 個別相談対応 (希望者のみ) ○内 容：ICT 機器整備・NW保守管理、無線AP、サーバー、ファイヤーウォールなど ○場 所：食堂 ○担当者：山口 ゆり 聖光学院中学高等学校情報教諭 ●施設見学
15:30	<p>分 散 会</p> <p>テーマ：「〈探究〉〈教科横断〉の視点から授業デザインとICT活用を考える」</p> <p>Aグループ 司会進行：森 涼 教育課程専門委員長 【会場：3階 ル カ】</p> <p>Bグループ 司会進行：松谷 茂 教育課程専門委員 【会場：3階 中 教 室 1】</p> <p>Cグループ 司会進行：鈴木 弘 教育課程専門委員 【会場：4階 高3ゼミ室3】</p> <p>Dグループ 司会進行：北村 聡 教育課程専門委員 【会場：3階 図書学習室】</p> <p>Eグループ 司会進行：須藤 勉 教育課程専門委員 【会場：3階 中 教 室 2】</p> <p>Fグループ 司会進行：平方 邦行 所 長 【会場：3階 マ タ イ】 助言指導：工藤 誠一 視察校理事長・校長</p> <p>Gグループ 司会進行：広石 英記 特別招聘研究員 【会場：2階 会議室1・2】</p> <p>Hグループ 司会進行：花家 徹 視 察 校 副 校 長 【会場：3階 マ ル コ】</p>
15:30	

16:30	閉会式			【会場：会場：ラムネホール】
			司会 川本 芳久 一般財団法人日本私学教育研究所理事・事務局長	
	1. 開式			
	2. 分散会報告	松谷 茂	教育課程専門委員	
		鈴木 弘	教育課程専門委員	
		北村 聡	教育課程専門委員	
		広石 英記	一般財団法人日本私学教育研究所特別招聘研究員	
	3. 総括	森 涼	教育課程専門委員長	
	4. 視察校代表挨拶	工藤 誠一	聖光学院中学高等学校理事長・校長	
	5. 閉会挨拶	平方 邦行	一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長	
17:00	6. 閉会			
			解 散	

●概要●

令和3年6月18日、「これからの授業デザインとICT活用を考える～〈探究〉〈教科横断〉の視点を踏まえて～」を研究のねらいとして、聖光学院中学高等学校（神奈川県横浜市）で開催し、133名が参加した。午前には石井雅章・神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部教授兼学長補佐・言語メディア教育研究センター長による講演「ICTを効果的に活用した探究型授業のデザイン」が行われ、午後に視察校の紹介、実践発表、授業視察、施設見学、さらに希望者には視察校のICT導入・管理についての説明やICT機器整備・NW保守管理、無線AP、サーバー、ファイヤーウォールなどの個別相談が行われた。続いて8グループに分かれ、「〈探究〉〈教科横断〉の視点から授業デザインとICT活用を考える」をテーマとして分散会を行い、参加者が課題を共有すると共に、交流を図った。



●開会式●

◆主催者挨拶 平方 邦行 一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長

当部会は、昨年中止となり、2年ぶりとなる。テーマは「これからの授業デザインとICT活用を考える～〈探究〉〈教科横断〉の視点を踏まえて～」であるが、先生方は今、いろいろなことを検討されているだろう。現状は予期せぬコロナ禍であるが、その前から学校をあげてICT活用に取り組んだ学校は多くはなく、学校差も相当ある。また、校内整備だけでなく、家庭環境が大きなネックになる場合も多々あった。国もGIGAスクール構想等対策をしているが、PCやタブレットが学用品であると認識すれば、生徒1人1人が持ち、学校だけでなく家庭でも自由に使えないと意味がない。子ども達が社会に出たときに役立つためにはどのような授業デザインをし、そこにどのようにICTを組み込めばよいかを考えていけるような内容を企画しているので、是非、真剣に取り組んで頂きたい。



◆視察校代表挨拶 工藤 誠一 聖光学院中学高等学校理事長・校長

本校も7年程前から生徒全員にChromebookを持たせ、校内Wi-Fi環境を整えてきた。しかし、見直しが必要なことが多数あり、絶えず、実施をしながら修正を繰り返している。少しでも先生方のお役に立てればと思い、本日の研修会を引き受けた。コロナ禍で、計画としては3回目での実施となったが、やっと先生方を迎えることができ、うれしく思っている。日々の教育実践の糧となる研修会となれば幸いである。



◆研修会運営方針 森 涼 教育課程専門委員長

昨年来のコロナ禍の中でオンライン授業が劇的に進んだ。公立学校よりも私立学校が先行して取り組んでいったが、まだまだ続くコロナ禍で、学校は対面授業が一番であるが、オンライン授業と対面授業をハイブリッドで組み立てるといふ工夫もこれからは求められる。国はGIGAスクール構想の中で公立

の小中学校に1人1台の端末を整備した。もちろんハード面での整備は大事だが、教員のソフト面での整備が追いついていない。また、中学校の新学習指導要領が実施され、来年度からは高等学校の新学習指導要領が実施される。ここではICTを活用した探究型授業がカリキュラム・マネジメントの軸になる。その点に対する先生方の意識も非常に高いものを感じる。当部会は「探究・教科横断の視点を踏まえて、これからの授業デザインとICT活用を考える」をねらいとして、過密なスケジュールで実施するが、先生方にとって実りの多い研修会にして頂きたい。



●講演● 「ICTを効果的に活用した探究型授業のデザイン」

講師 石井 雅章 神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部教授
兼学長補佐・言語メディア教育研究センター長



私は教育学が専門というわけではなく、環境問題の社会学が本来の専門分野です。前任校の城西大学ではプロジェクト型の学習活動や授業、いわゆるPBLを展開してきました。最初からPBLを目指していたわけではなく、学生にとって意味のある学びの機会を生み出すためにどうすればよいかと試行錯誤するうちに、PBLに行き着きました。

一方、教育・授業の現場でのICT活用に取り組む中でも、学びとは何か、授業デザインをどうすればよいかという本質的な課題に向き合うことになりました。こうして、PBLやICT活用の実践を通じて、学びのプロセスや授業デザインについて深く考えるようになったわけです。

中学・高等学校には学習指導要領があります。そこでは探究がどのような学習として設定されているのでしょうか。中学校の総合的な学習の時間は、「よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていく。そのための資質・能力を次の通り育成する」とあります。高校での総合的な探究になると、「自己の生き方・あり方を考えながら、よりよく課題を発見し、解決していくための資質・能力を次の通り育成する」とあります。総合的な探究では、「自己の在り方・生き方と一体的で不可分な課題を発見する」という部分が加えられているわけです。ここでは「課題を発見する」ことに力点があって、その課題の発見は自身と切り離されたものではなく、自己の在り方・生き方と一体的なものを扱うということが総合的な探究のイメージとされています。一方、学習指導要領の「解説」には探究課題が例示されていますが、外国人の生活者とその人たちの多様な価値観（国際理解）や情報化の進展とそれに伴う経済生活や消費行動の変化などが挙げられています。例示されているものはそれぞれ良いテーマなのですが、生徒にとって自己の在り方・生き方と一体的な不可分な課題として捉えることができるのでしょうか。例示されているテーマをただ取り上げただけでは、生徒にとって自己の在り方・生き方と不可分な課題にはなりません。

学習指導要領では、継続的な探究のプロセス（過程）は課題設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現という流れで示されており、このサイクルが繰り返されることで継続的な探究のプロセスが構成されます。ただ、「総合的な探究の時間」という授業の枠内で、どこまで取り組んだらよいのでしょうか。探究プロセスの1サイクルの部分をやめるのか、複数のサイクルを1年間かけてやるのか、学年毎にテーマを分けるのか、あるいは学年を連続して1つのテーマに取り組むのか。どれが正解というわけではなく、授業の中でどの範囲まで扱うのかについてはいろいろな捉え方があるが、そのことが逆に探究の時間の担当者には疑問となり、迷うところとなります。

また、学習指導要領では、探究とは日常生活や社会に生起する複雑な問題についてその本質を探って見極めようとする学習と書かれています。問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習活動、かなり幅の広いスコープであることがわかります。探究の対象は日常生活や社会に関係する複雑な問題であり、それをただ表面的に知るのではなく、本質を探って見極めようとする学習活動であり、かつその問題の解決に向けたアクション（活動）が発展的に繰り返されていく。ここまで含めたものを探究と定義しているわけです。問題解決へのベクトル（志向）があり、扱う課題は日常生活や社会の課題で、自己の在り方や生き方と密接に結びついたものとなる。このように理解したときに、指導要領で示されている探究の過程は本当にこれでいいのかという疑問が生じます。指導要領で示されている探究の過程とは、①課題を設定、②情報を収集、③整理・分析、④まとめ・表現というプロセスなのですが、このプロセスで本当にこの大きな枠組み、探究として定義されている学びのプロセスは実現できるのでしょうか。①から④のプロセスはいわゆる

調べ学習のプロセスとほぼ同じです。それでは、調べ学習と探究はイコールなのでしょうか？恐らく違うでしょう。それでは何が違うのでしょうか。

学習者はどのように学ぶのでしょうか。いわゆる知識伝達論のような学習モデルにおいては、教員や教育者が知識や情報を学習者に物理的に与え、それが伝達され、知識や情報が移植されるという前提になっていますが、実際にはそのような単純なプロセスではないはずです。では我々はどのように自分の知識や経験などを増やしているのでしょうか。私が PBL の実践を通じてモデル化した学びのプロセスにおいては、自分とは異なる存在（《他者》）との相互作用の繰り返しによって、自分の中にすでにある知識や経験と動的に交互りながら学習者の中に変容を生み出し、こころの中でその知識・経験が更新されながら増えていく。だからすでに持っている知識や経験が、《他者》との接触により、増幅されたり、形を変えたりしながら、いまままで意味づけできていなかった消化不良のような経験の意味が分かるようになる。学習者はそれをいきなり外化するわけではなく、学習者のこころのなかで内的に言語化する。このような内的な言語化というプロセスを経て、その上でさらにそれを他者に対して外化するわけです。こういうことを私達は繰り返している。これがより広い意味での学びのプロセスである私は考えます。いわゆる試験というものは、学習者によって外化、言語化された内容と、もともと体系化、言語化されていた情報と照らし合わせることにより、「この人は理解をしている」とか「この単元の内容を把握・定着している」ことを確認しているわけです。

調べ学習のような学習過程においては、課題がモノのように存在し、それを学習者に与えてあげれば、あとは自動的に探究が始まると思われていることがありますが、それはかなり単純化されていると思います。また、教員ではなく学習者が自身で課題を選べば探究や PBL になるのかということとそんな単純なものでもありません。学習者が選択、設定したから、「これは PBL です」、「探究になります」ということではないわけです。

本質的な探究学習のプロセスでは、学習者自身では思い通りにコントロールできないものとの接触と相互作用があり、それと向き合うことを通じていろいろな刺激を受けているわけです。それがその学習者が持っているこれまでの知識や経験を通じた解釈や感じ方、捉え方により、意味を持つ情報に変化する。だから他者と触れ合い、向き合ったからといって、すぐに意味のある情報にはなりません。外からいきなり課題が与えられても探究のプロセスにならない。学習者自身の中で《他者》との相互作用を通じた刺激が意味のある情報へと変容し、はじめて学習者の内面で課題が認識されるようになる。そして、課題として認識されたことを踏まえて自分自身としてもう一度、《他者》への働きかけを返すことにより、《他者》からのさらなるフィードバックが返ってくる。このプロセスの繰り返しにより、課題に対する認識が変容し、探究のための課題の設定の仕方が変わったりする。課題はモノのように与えられるのではなく、他者との相互作用を通じて、学習者自身の中に創出されてくるという観点が大切なのです。

探究学習においては学習者の認識の変容とか、課題の再定義という契機が多く含まれています。これがないと探究にはなりません。自身の人生と不可分な課題の本質を見極めることにはつながらないわけです。課題を設定して、情報収集し、整理・分析し、まとめ・表現をする。この調べ学習のようなプロセスも大事な学習過程のひとつですが、学びのプロセスと課題発見・創出という観点から考えると、そもそも《他者》との向き合いがあり、課題の仮認識があり、そして《他者》への働きかけがあって、さらに課題が再定義される。このような問いの創出が随時繰り返されていく。これは本来の探究のプロセスだと言えます。

探究に向けた 3 つのポイントを整理すると、課題認識のための機会、まずは《他者》との向き合いが必要であるということ。《他者》とは人間や社会という意味だけではなく、自然も広い意味での《他者》です。そして、課題があると単に認識しただけでは先に進みません。今度は働きかけの部分が含まれている必要になります。そして、課題とそこから生じる問いを区別することも大切です。他者との相互作用から新たな問いが出てくる。その創出されてきた問いから課題が再定義されることがある。そのプロセスが大切だということになります。

このような学びのプロセスモデルの構築は、頭で考えたのではなく、実践しながらたどり着いたものです。前任校である城西大学現代政策学部の教員の時、学生たちは経済や政策についての知識を学んでいましたが、授業で修得した知識・情報を元にちょっと調べた程度で政策提言したりしても、社会への関わり方としてはあまり意味をなさないと考え、自身が生きる中で何が本質的な課題なのかを体感的に理解する機会が必要で

あると思い、休耕地活用プロジェクトを始めました。休耕地活用プロジェクトは 2 つの関心事で回している。地域資源として農地を維持するという社会課題としての関心、もう 1 つはこの政策を学ぶ学生にとって真にリアリティのある形で政策について学ぶという学習機会を創出するという関心です。自分たちが生きる基盤としてのしくみと重要性について体験的に学ぶ機会を創出することが私の授業デザインのテーマだったので。

探究の過程は多様です。調べ学習も大事であり、高大接続を考えるとアカデミックな意味での学問的探究も大事であるが、必ずしもそれだけではない。「やってみる、問いが生まれる、調べる、やってみる」という学習プロセスのように「やってみる」ことから始まることもあるし、「仮説を立てて、実験をし、結果を記録・考察して、更なる仮説を立てる」ような仮説検証型の探究もあります。さらには「当事者の話を聞く、共感する、行動する、憤る、そして行動する、工夫する」という学習プロセスもあるでしょう。探究の過程は多くあるので、多様なバリエーションは見える化した方がよいはず。お互いが実践していることを理解し、尊重できた方がよいでしょう。例示された形式にとらわれて、いわゆる調べ学習になっていないから、あるいはアカデミックな探究になっていないからという理由で探究学習ではないと言うのはもったいない。

探究の過程は連鎖するという事は、プロジェクトをやりながら大事にしてきたことのひとつです。他のチームとの協働により、問いと実践が深まります。大学も中学高校も学事暦、時間割、年間計画に縛られていることをもっと意識するとよいでしょう。それらに内容を合わせるとさまざまな無理が生じてきます。探究プロセスは何年も続くものであって、必ずしも授業時間や学時暦に収まるものではなく、その中のある部分を構成していたという観点が大事なのだと思います。

探究型授業における ICT 活用についてお話ししましょう。まず何よりも、ICT を使うことが目的ではないということ。あくまでも探究における学習プロセスが大切なのであって、ICT を利用するかどうかは重要なのではないということです。しかし、ICT を活用すれば本当に充実した探究過程を生むのは経験的にも明らかです。探究プロセスのどの段階で見ても効果があると思います。相手に理解してもらうために行う発表の際にもいろいろなツールを使うことができますし、多様な《他者》との接触機会を得たり、アクションを起こしたりする際にも ICT は有効です。ICT を使うことによって、探究学習のどのプロセスでも学習の機会、チャンスを増やすことができるというわけです。

ICT の強みは多様なメディア（動画、音声、文字、図表）を同時に扱えることです。また、インプットに強い。時間と空間の制約を超えることができます。さらには多様な形態・表現でのアウトプットができる。シェアがしやすい。繰り返しに強い。何度もチャレンジできる。ストック、蓄積ができる。複数のバリエーションを保存できる。時空を超える意味では他者との相互作用の可能性を大幅に広げてくれる。探究過程における他者との向き合い、課題の認識、他者への働きかけ、問題・課題の再定義、このようなプロセスを回していくことに ICT は非常にサポートしてくれます。我々は時間にかなり縛られるので、その制約を超えてよりよい学びのプロセスが回して行くためには ICT は欠かせません。そのために、使いたい場面でいつでも使えるようにすることを前提にしていきたいものです。あらゆる場面で学びのプロセスになり、探究のプロセスとつながっているからこそ、使いたい場面でいつでも ICT を使えるようにする。そのためには可能な限り学習者個人の所有にして、できるだけ自由に使える状態をつくるのが理想です。

いまは毎回の学習の振り返りでも ICT を使っています。今年からは大学で e ポートフォリオを新たに開発し、どの授業でも正課外の授業でも学びの振り返りができるようにしました。

探究型授業のデザインについて、授業デザインの観点からまとめると、とにかく目的から考えることが大切です。手段から入らないこと。PBL、探究型授業をやらなければ、ICT を使わなければならない、この科目をとる何年生の学習者にこの 1 年間で一体何が身につけてほしいのかという目的から考えることです。その上で、その目的に到達するために学習者が課題もしくは問いを創出するプロセスを重視します。そこではやはり探究の過程全体のモデルを意識するという事と、私達の学校では学びというものをこのように考えている学びのモデルを提示することが大切なのではないでしょうか。

目的から考えるというのは総合的な探究であればプロジェクトの目的かもしれませんし、教科探究であれば科目もしくは単元の目的になるかと思います。正課外であればそのプログラムの目的がそれにあたります。ともすると、探究の授業も先に枠組みがあってそこに当てはめるという授業設計になりがちですが、本来は

枠組みが先にあるのではなく、「この学年のこのタイミングのこの生徒達に何を学んでもらえればいいのか」から考えることに尽きます。

私は私学に勤務しているが、学習者としては公立の学校しか通ったことがありません。しかし、私学に勤務してからは、各校が掲げる私学の建学の理念や特徴はとても重要なものだと感じています。「こういう考え方や **philosophy**、あるいはアドミッション・ポリシーに基づいて我々は教育を提供していて、それに基づいて学習機会の提供や探究学習を行っている」というように、私学なりの理念と考え方に基づいた学びのモデルの提示とそれらの連動性が大事であると思います。

●学校視察●

午後からは会場校である聖光学院中学高等学校の学校視察を行った。

◆学校紹介 花家 徹 聖光学院中学高等学校副校長

キリスト教の学校として建学の精神や教育理念においてカトリック的世界観を土台としている。文系と理系の壁を取り払っていくという話もあるが、幅広い教養（リベラルアーツ）を重視している。

本校の生徒は全員が外部進学を目指しているためそれに応えるミッションがある。高校3年生向けに設けている「夏期講習」では夏休み中6ターム（夏休み40日中30日間）講習の時間を設けている。しかし、すべてが大学受験を目指したものではない。焦点を当てすぎるとなかなか効果が出ず、変化が見られない。15年程前から本校は様々な改革を行った。

「聖光塾」は、教科の枠を超えた体験型の講座となっていて、実際に自然に触れることで五感を磨くことを狙いとした講座である。当初は理科的な実験や観察が多かったが、今はフライフィッシングといった約40種類の講座を設けている。指導する講師はその道の専門の方に依頼をしている。

2つ目として、「選択社会科演習」は中3で実施している。最近、地域課題を解決する取り組みが多いが、都会の子供達は地方の実態を知らない現状がある。肌で感じるフィールドワークとなっている。

3つ目として、中2が土曜日に実施している「選択芸術講座」がある。

4つ目として、国際教育として「ホームステイ」を導入し、カナダ、ニュージーランド、アメリカ東海岸・西海岸、フィリピンといった様々な講座を設けている。昨年からはコロナ禍の影響があり、代替プログラムとして、ネイティブの先生からしっかり学ぶ「聖光スタディーキャンプ」と探究・情報のジャンルについて、英語を絡めながら学ぶ「ソーシャルイノベーションキャンプ」を行っている。

高1が土曜日に実施している「キャリア教育」という講座がある。高2で文系・理系に分かれるので、自分の進路を考える講座であり、様々な分野の方をゲストスピーカーとして招いている。

家庭科でも裁縫実習では本校の保護者に手伝ってもらい、調理実習は、専門家や企業に協力を得て、単なる調理実習ではなく、ワークショップ等で食について様々な角度から考えるようにしている。

話題になっているeスポーツも本校では最近サークルが立ち上がった。アイデアコンテストや春休みにはプレゼンコンテストを実施した。

◆実践発表 名塩 隆史 聖光学院中学高等学校教諭

2017年よりスーパーサイエンスハイスクールに指定を受け、今年で5年目となる。導入当初、工藤校長は「決して理系の学生を増やす目的で導入するのではない。自然科学、理科、数学、情報だけでなく、社会科学や人文科学等も踏まえてリベラルアーツの視点を重要視する形で導入していく。」という理念を掲げた。

レゴシリアスプレイメソッドは、まだはじめて4年目くらいで色々模索中だが、もともとは大人向けでGoogle等海外の企業で採用された組織のためのメソッドである。組織として何か問題が発生したときに、多様な価値観を持った構成員がそれぞれがよかれと思って色々おこなっているもの実は別々の方向に向いて一つになれていない。学校組織でもよくあるケースだと思うが、その問題解決を促すためのメソッドである。まず、言葉は使わず、各々が秘めている考え方（価値観や関心事、得意とすること、組織について思っている理想）をブロックで表現していくというもので、イメージとしては箱庭に近いものである。情動のように思わず言ってしまったこと、それによって相手に反感を買ってしまい、険悪な感じになることは中学生でも多々ある。それをいきなり言葉



で出さずブロックで表現してみる。ブロックで表現すると普段では見えない自分の強みを見ることが出来る。その後 4、5 人のグループを作り、作品に言葉をつけて内容を話してもらおう。そうすると、意図的に説明できなかった作品の部分、つまり、無意識にたまたま作ってしまった自分の特徴が出てきているはずだが、大体話者はそれに気づかない。なぜ、このブロックをここに置いたのか、それが自分の目線の先、上の方か下の方か誰の方に向いているのか、どういった問題に目を向けているのかそういったものが作品の中に表れている。共有しているメンバーから質問を受け、それに対しては強制的に答えなければならないというルール付けをしている。意味付けできていないことを自覚してもらい、それに新たな意味を付けていくというように、まずは自分自身について理解を深めていくことからメソッドがスタートする。この一連を通して非認知能力の部分がかなり育まれる。後ほどチームで合作した作品につなげていく。また 1 つの社会課題でもどこに関心を持っているかは当然一人一人違ってくる。同じ作品であってもブロックによって解釈が異なってくる。以上を踏まえた上で、チューブや紐といったパーツを使って、例えば一つの問題が良い影響を与えるときは赤いチューブを結び、負のつながりを持つときは青いチューブで結んだりして、1 つのシステムとして社会課題を考えていく。日本人が一番欠けている視点と思うが、最近流行の「システム思考」という考え方になる。それを落とし込んで、「組織の在り方」について考えていくということが着地点となっている。複雑系としての社会課題あるいは社会の構造を理解することがねらいとしてある。今まで、身近なことしか考えられてなかったが、観察力の低下や地球規模で物事を考えること、将来性を考えることがこれから必要となる。そのため非認知能力を高めることを目的としてレゴシリアスプレイメソッドを活用している。正直最初は質問力を上げることや内省を目的としたが、非認知能力の要素をいくつかの項目でスキル化して高めていくことを授業の最初に必ず確認している。

昨年、授業を受けた生徒の感想で「意味を付けていくことは意義を見出していなければ当然できない。何らかの意味を与えることが一番の本質だと思う。」とあった。レゴシリアスプレイの一番の肝は何もない一見無意識に作った作品を強引に言葉にして意味が生まれることである。それによって自分の着眼点や気づかなかった盲点等に気づかされるのが肝である。今後もこの点を意識して授業を続けたい。

スーパーサイエンスハイスクール授業の導入による学びとして、まず何のために探究を行っていくかを我々は初年度は考えていなかった。PDCA サイクルを回していく程度で考えていたが、本校では質問力、課題設定力育成ということでこれは今後も継続的な課題となっていくだろう。何をするか、どこまでするかということだが、成果を出させるにはフィードバックが無ければならないが、とにかく時間が掛かる。そのためとにかく問いを立てさせることを重視し、あとは「情報」の授業を軸として、情報の検索をすることを通じて教科横断型のテーマ等ができるのではないかな。

レゴシリアスプレイの着地点にシステムという言葉がある。システム思考というものがそもそも教科横断につながるのではないかと気づき、システムとは何かということを探求授業の一番最初の出発点として様々な教科とコネクションを取っていく授業を今後は考えていきたい。

◆聖光学院中学高等学校の ICT 導入・管理について（希望者のみ）

本校の ICT 導入では、準備委員会を設けず、教職員への研修会も行わなかった。7 年前に工藤校長より教職員全員に Chrome Book を配付するという話があり、導入が始まった。導入後、すぐに G suite のクラウドサービスを活用するようになり、よく分からないまま進んだ。Word や Excel は使いこなせてもクラウドサービスに戸惑う教職員が多くいた。ただし、使わなければ全てにおいて取り残されてしまう状況であった。そこから数ヶ月が過ぎ、そのサービスの便利さに気づくと本校ではなくてはならないものとなった。そして、事務効率化・働き方改革に直結した。

なぜ、工藤校長が突然、ICT を導入したか。生徒達のプレゼン能力、英語力の強化のため、ICT 導入への揺るぎない想いがあったからである。全教職員、生徒、保護者それぞれに Google アカウントを配付し、まずは完璧なペーパーレス化を行った。また、Chrome Book を生徒に持たせることでゲーム等で遊んでしまうのではという意見も保護者からあったが、一元管理をしているためそういったアプリケーションはダウンロードすることができない。また、ネット上でいじめがあった場合も 1 人 1 人のメールを確認することができる。このようなことは学校のトップ中心の体制作りをないと難しいだろう。

ICTに関する校内研修等が無かったので教職員同士で教え合い、個々にスキルアップをしていった。学校独自の体制を作っていく上で、年配の先生は若手の先生に聞きづらいということがある。そこは、学校長等トップが率先して声を掛けて解消すべきである。オンライン英会話等で普段の授業で使っているかを確認できる。本校の校長も隙間時間を見つけて実際に英会話の授業を受けている。普段の会話だけで無く、契約を結べる程度に英語力が上がった。中学生・高校生にできないわけがない。Chrome Book と同時にこのような取り組みも導入したことは保護者の納得要因となっただろう。Wi-Fi 導入も全教室で使うとダウンしてしまう等のトラブルがいくつかあったが、アクセスポイントの増設をして改善した。

本校がクラウドサービスで Google Workspace for Education Fundamentals (元 G suite for education) を採用した理由は無料で使え、使い勝手が良く、Chrome Book と相性が良かったからである。それぞれの学校に適したクラウドサービスを利用されることを奨める。端末についても iPad でもよいが、Chrome Book は一元管理ができるところが大きい長所である。いろいろなアプリケーションがあるが、ほとんどのアプリケーションを活用している。

例えば、Google Form は普段なら保護者の捺印が必要な提出資料も保護者のアカウントから提出された資料は本人承認済みとして受理することが可能となった。また、催事の申込状況についても Form から申し込んだ場合、すぐにスプレッドシートに反映され、集計等も容易となる。欠席・遅刻・早退の連絡も Form で受け付けられる。保護者専用の情報サイトも設け学校行事の中止等最新情報を確認できる場を設けている。授業でも生徒からの質問等で活用をしている。

◆ICT 機器整備・NW 保守管理、無線 AP、サーバー、ファイヤーウォールなどの個別相談

山口ゆり・視察校情報教諭が、視察校の ICT 機器整備や保守管理等、参加者への個別相談に応じた。

◆授業視察・施設見学

4 グループに分かれ、視察校の先生方の案内および説明により、第 5 校時は中学 3 年生「探究基礎」の授業、第 6 校時は高校 1 年生「理数探究」の授業を中心に視察を行った。

授業視察後は 8 グループに分かれて、授業視察同様、視察校の先生方の案内と説明により職員室や図書館等の施設を見学した。



●分散会 ● 「〈探究〉〈教科横断〉の視点から授業デザインと ICT 活用を考える」

参加者が 6 グループに分かれ、①「探究」授業について、②教科横断型授業について、③ICT 活用について、自校の事例紹介や問題提起、さらには視察校の先生方への質疑応答も交えて情報交換を行った。

各グループの司会・指導助言は、森涼・専門委員長（学校法人石川高等学校・石川義塾中学校理事長・校長）、松谷茂・専門委員（文化学園大学杉並中学高等学校校長）、鈴木弘・専門委員（香蘭女学校中等科高等科校長）、北村聡・専門委員（京都外大西高等学校理事・校長）、須藤勉・専門委員（東京私学教育研究所参与）、平方邦行・所長、広石英記・特別招聘研究員（東京電機大学副学長）、花家徹・視察校副校長の 8 名が行った。また、各グループには工藤誠一・視察校理事長・校長を含め、数名の先生方に巡回参加を頂き、参加者と質疑応答を行った。



●閉会式●

◆分散会報告

8グループのうち、4グループが代表して、松谷・専門委員、鈴木・専門委員、北村・専門委員、広石・特別招聘研究員が分散会の報告を行った。

○松谷 茂 専門委員 (A・Bグループ)

ICT環境の整備は各学校様々だが、当部会でのICT関連の研修内容は参考になったという感想を多く頂いた。探究学習の進め方については石井氏の講演で理解を深め、聖光学院中学高等学校の実践発表での事例が大変参考になったということである。また、TAを使った授業視察において、十分授業が成り立ち、生徒も主体的であったことに感心していた。参加者から保育科の生徒による園児の遠足プランの作成を行っていることや、企業や自治体との連携に取り組んでいる事例の報告もあった。



○鈴木 弘 専門委員 (C・Eグループ)

視察校の実践発表等での「失敗を恐れないで、それを糧にしている」、「強制しない、道具として考えていく」という姿勢や方針が大いに参考になっていた。参加者から「教員が普段から探究という姿勢を持っていなければ生徒に教えられない、形だけの、聞きかじりだけの探究という考え方はやっても結果的にはうまくいかない」、「完璧を期すのではなく、とにかくやってみるといって各学校は取り組む」という考え方も述べられた。



評価等に関して点数化、ルーブリック評価等の議論も行われた。その他、学校内での導入に関しての教員間のズレやWi-Fi環境が十分に整備されていないなど課題や悩みも共有した。

○北村 聡 専門委員 (D・Fグループ)

基本的な知識と探究は学校によってレベルに差があり、その差の克服について議論があり、基礎的な知識と探究の順番を大切にすることができることからやっていけば良いとのアドバイスもあった。ICTに関しては、1人1台の端末の時代となり、各校ではその活用方法が課題となっている。その中で探究をどのように行っていくかも課題となっている。テーマの設定や学校内の組織作りにも多くの問題を抱えている。



○広石 英記 特別招聘研究員 (G・Hグループ)

探究をすでに取り入れている学校の多くは探究のために教師の時間が裂かれることに懸念があり、業者とコラボする学校も多い。業者のコンテンツやプログラム、資料を使い、まず1年間で探究とは何かを先生も生徒も学ぶ。2年目以降は自校の実態に合わせて、業者の方法をベースにアダプトする作業を行う学校が多い。その意味では探究は型から入ることが大事である。型をしっかり作り、自分に合わせて方法を覚えていく。その型を当てはめていけば業者の知恵を借りることは先生方の負担を考えると非常に良い。



ICT活用のユニークな事例があった。コロナウイルス感染拡大のため中止となった修学旅行において毎年訪れていた市の市議会に旅行会社を頼ってコンタクトをつけ、市議会に生徒がオンラインで参画するという試みが報告された。先生だけではなく、外のつなぐ役の人、スペシャリストに頼むことは素晴らしい機転である。また、授業以外でも学級通信や出欠管理、提出物の管理があり、すべてICTで行っている学校があった。

授業でICTを非常に活用される先生の事例だが、コンテンツを作りすぎて生徒が追いつかない場合がある。学びを生かすためにICTがあるわけで、ICTを使うために授業があるわけではない。ICTは手段、道具であり、それを使うことが目的になると、ICTは子どもにとって不幸なことになる。道具としてどう使うかを注意しなければならない。

◆総括 森 涼 教育課程専門委員長

午前中は「ICT を効果的に活用した探究型授業のデザイン」を演題として石井雅章先生から講演を頂いた。大変わかりやすい講演であり、学びのプロセスと探究との関わりにおいては他者との向き合いから課題を認識し他者への働きかけを通して課題を再定義していくことの大切さ、解決したい課題から新たな問いが発生していくという話をうかがった。そして探究における ICT 活用の強みなど具体的な事例を通して、様々な角度から教えて頂いた。



午後は聖光学院中学高等学校の花家先生、名塩先生から学校紹介並びに SSH の 5 年間の実践を通して様々な苦労や探究授業の報告があった。今後、各校が探究授業を進めていく上で大変参考となった。その後の授業視察、施設紹介では同校の先生方に懇切丁寧な説明を頂いた。最後の分散会では十分な時間がとれなかったが、短い時間の中で意義のある情報交換ができたのではないかと感じた。研修会はこれで終了であるが、探究授業へのカリキュラム・マネジメントはこれからスタートしていく。今回の研修の中で得た学びや気づきを是非、先生方の学校に持ち帰り頂き、明日からの私学教育に大いに生かして頂きたい。

◆視察校代表挨拶 工藤 誠一 聖光学院中学高等学校理事長・校長

先生方のご期待に添えるかどうか不安であったが、少しでもお役に立てればと考えている。神奈川県私立中学高等学校協会の理事長としても常に加盟校の先生方にはそれぞれの私学は独立しているが、これからはそれぞれがネットワークを組んで進んでいかなければならないと申し上げている。同協会では昨年、神奈川私学就学支援センターを立ち上げた。更に今は職域のコロナウイルスワクチンを打っている。私達、私学の教員は子ども達の前で夢を持って明日を語るようにともに歩んでいきたい。



◆閉会挨拶 平方 邦行 一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長

いろいろな学びがあった。ハッと気づかされるような内容もそこにはあったと確信している。一般財団法人日本私学教育研究所としては、昨年、ほとんど延期・中止となった研修会を何とか今年是对面を中心として実施していこうという決意のもとにいろいろな研修会を企画している。これから夏に向かって冬まで多くの研修会を予定している。その内容については全国のすべての私立中学校高等学校に実施案内を送付し、またホームページにも掲載しているので興味がある方は是非参加して頂きたい。



様々な今の教育に対して必要と思われる研修会を実施していくので、是非ご理解ご協力を賜りたい。

●参加者アンケートより● 回答数：119名／参加者数：133名（回答率89.5%）

○当研修会への参加動機

参加動機の多くがICT活用と探究であった。ICTについては今後の導入にあたり、管理等に関することから、導入後の活用方法の模索やよりよい活用を目指している学校からの参加者等様々であった。探究については2020年度からの新学習指導要領で取り扱われることにあるため、導入や授業の進め方という課題を持って参加されており、ICT活用と探究授業に先進的に取り組んでいる聖光学院中学高等学校が視察校となったことで多くの先生方が参加されたようである。また、視察校はもちろんであるが、他校の様子についての情報交換も参加動機の1つとなっている。

○講演についての感想

自身の経験をベースに事例を交えての講演であり、大変わかりやすく参考になったという感想が多かった。また「課題よりも問いが大事」「問いの中から気づき生まれ、課題が再定義される」ことには多くの先生が共感していた。ICT活用については使うことが目的ではないこと、活用の重要性、いつでも使えるようにする環境整備は大いに参考になったという感想が多かった。

○学校視察（聖光学院中学高等学校）についての感想

学校紹介は短い時間で多くの事項をわかりやすく説明頂き大変好評だった。実践発表は特に失敗例も取り上げて発表頂いたことで大変参考になったという感想が多かった。授業視察はICTを活用した授業や探究の授業が大変参考になったということ、またTAの活用に大きな関心が寄せられた。

○分散会についての感想

参加者各校でのICT活用や環境整備、探究の進み具合、さらに視察校の質疑応答や、司会進行の専門委員の先生方等のアドバイスなど充実した内容であったことがアンケートからうかがえるが1時間弱の限られた時間のため十分な協議ができなかったことが残念という声もあった。

○研修会全体についての意見・感想

講演、学校視察等すべてのプログラムで満足のいく内容であったという感想が多かった。探究やICT活用において、今後の自校での取り組みの参考とするといった意見も多くあった。また、コロナ禍でオンラインの教員研修等に参加されていた参加者からは、全国から集まった先生方との対面での研修会を喜ぶ声もあった。時間的にももっと長時間の研修を希望する声もあった。

○今後の研修会への希望

今後の研修会の希望としては、今回と同様、探究やICT活用関連の内容を希望する意見が多かった。他にもカリキュラム・マネジメント、ルーブリック等の評価に関する内容、「歴史総合」「公共」等の新教科の扱い、新学習指導要領関連の内容を希望する意見もあった。学校視察については、探究やICT活用の先進校の他にSTEAM教育やSDGsに取り組んでいる学校を希望する声もあった。

都道府県別参加者数

No.	都道府県	人数	No.	都道府県	人数	No.	都道府県	人数
1	北海道	0	17	石川	0	33	岡山	0
2	青森	0	18	福井	0	34	広島	0
3	岩手	0	19	山梨	0	35	山口	0
4	宮城	0	20	長野	1	36	徳島	0
5	秋田	0	21	岐阜	0	37	香川	0
6	山形	0	22	静岡	0	38	愛媛	0
7	福島	0	23	愛知	7	39	高知	0
8	新潟	0	24	三重	2	40	福岡	6
9	茨城	5	25	滋賀	0	41	佐賀	0
10	栃木	20	26	京都	2	42	長崎	0
11	群馬	0	27	大阪	6	43	熊本	0
12	埼玉	1	28	兵庫	4	44	大分	0
13	千葉	6	29	奈良	0	45	宮崎	0
14	神奈川	17	30	和歌山	0	46	鹿児島	2
15	東京	53	31	鳥取	0	47	沖縄	0
16	富山	0	32	島根	1			
							合計	133
							参加都道府県数	15

教科別参加者数

教科	人数
数 学	29
理 科	25
国 語	18
英 語	14
地歴公民(社会)	18
そ の 他 ※	12
管 理 職	17
計	133

(※情報・商業・宗教・保健体育・家庭科)

**次年度（令和4年度）私立学校専門研修会・教育課程部会は
大阪府大阪市・常翔学園中学校・高等学校／大阪 CORONA HOTEL【新大阪会場】において
令和4年6月17日（金）～6月18日（木）に開催致します。**